

二 歌人の死 谷岡亜紀

この春、武川忠一さんと安永路子さんが相次いで亡くなった。偶然ながらお二人とも九二歳だった。武川さんとはあまり親しくお話ししたことはなかったが、早稲田の学生時代、武川先生に卒論を見ていただいていた友人から、その温和で誠実なお人柄についてずいぶん聞かされた。安永さんとは、二十年ほど前「短歌」の安永路子特集に原稿を書いたところ、包みが送られて来た。入っていたのはピンクのスカーフだった。なんと和紙の巻き物の手紙が添えられてあり、達筆すぎてほとんど読めなかったが（なにせ書家としても高名だった）、「貴女」という文字だけは判読できた。後にパーティーでお会いして、私が男だと知り、とても恐縮されていた。改めてそのようなことを思い出している。

武川忠一の代表歌集は、やはり『水湖』ということになるだろう。昭和34年刊行の第一歌集である。

- ・ ゆずらざるわが狭量を吹きてゆく水湖の風は雪巻き上げて
- ・ 父の外に立ちいる決意少年に水湖は固き風景となる
- ・ 放埒の父の生涯思いおりついに小さく自愛のわが生
- ・ 亡骸の父が結べる口もとにひげ白ければ母は哭けるや

温和な風貌とは裏腹に、作品にはある種の厳しさが見られる。特に「放埒の父」と「父により泣きし母」、そして自らの少年時代を

歌う作品には、アンビバレンツな感情の起伏が色濃い。芯の部分にあるのは自省、自律、克己といった強い倫理性である。生真面目でつましい時代の翳が、歌集全体に反映されている。

そしてまた、そうした時代の〈都市〉のスケッチにおいても、『水湖』は独自の世界を切り開いたと言える。

- ・ 造らるる巨船はすでに聳え立ち横さまにその非情を保つ
 - ・ 観覧車ゆるく廻れば見おるされ人間の街の地平の濁り
 - ・ 工事場の音中斷し鉄骨の地に突きささる表情一つ
 - ・ 安永路子歌集では『魚愁』。やはり第一歌集である。
 - ・ 何ももの声到るとも思はぬに星に向き北に向き耳冴ゆる
 - ・ ながかりし病ひのあとを生きつなぐしづけき生も呼ばむ戦後と
 - ・ 濫觴にかかる寂しき青ありき湖見しのちの寒き薄荷酒
 - ・ 焼きつくし野火の熄む日に鮮しき季節は白き雨となりゆく
- 安永は二十代から三十代前半にかけて結核の闘病生活を送り、歌人としてのデビューも比較的遅かった。歌集には、そうした日々の断念と再生へのつましい祈りが込められている。
- ・ 紫の葡萄を搬ぶ舟にして夜を風説のごとく発ちゆく
 - ・ つつましき冬となりつつ灯を入るる夜にあつかひも儀式のごと
する

乾きたるもの聖ければ冬の樹を組みし吾が椅子未来に向けよ
さらにこのような予感に溢れた物語性も、『魚愁』の世界である。未来への希求が敬虔なロマンとして歌われている。

『水湖』は四〇歳、『魚愁』は四二歳での第一歌集だった。そして、その第一歌集が生涯を代表する歌集となったことでも、この二人の歌人には共通するものがあつた。